陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考

――「外人」の解釋史の概要――

門脇廣文

はじめに
【1】一九五九年～一九八九年の三十年間における「外人」解釋史の概要
【2】「外人」の解釋の內容
（一）「外國人」と解釋するもの
（二）單に「桃花源の外（そと）の人」と解釋するもの
（三）「別世界の人」と解釋するもの
（四）內山氏の新たな見解――「洞天」としての桃花源觀とそれにもとづく「外人」の解釋――
（五）內山論文以後の「外人」の解釋
（六）以上のまとめ
むすびにかえて

はじめに

筆者は、一九九九年と二〇〇二年に小論[1]を公表し、〈桃花源記〉に關するこれまでの論説を整理した。そのうえで、それぞれの問題點を指摘した。そこでは保留しておいたことの一つに、〈桃花源記〉に三度あらわれる「外人」の解釋についての問題がある。「外人」という言葉の解釋についての問題とは次のようなことである。〈桃花源記〉に「其の中に往來し種作する、男女の衣著は、悉く外人の如し（其中往來種作、男女衣著、悉如外人）」という一文がある。この一文について田部井文雄氏が一九八九年のシンポジウム[2]において次のように述べたところの問題である。

（この「男女の衣著」を比喩する「外人」という言葉は）昭和三十四年（一九五九年……門脇）十一月の一海知義さんの〈外人考[3]〉という論文以來、現場（高等學校の現場……門脇）の教師を悩ませている問題であります。

のちに詳しく述べるが、一海知義氏が〈外人考――桃花源記瑣記――〉で提示した三つの「外人」についての理解は次のようなものであった。一海氏の論考より前の二種の譯注書[4]においては、三つの「外人」のうちの最初の一つを「外國人」と理解し、その他の二つを「桃源鄉の住民にとって外部の人」と解していた。しかし、一海氏は「外人」を「外國人」と解することは中國語としてはできず、三つとも「桃源の人々からいっての『外の人』でなければならぬ」とするのである。この二つの解釋のいずれが正しいのか、それが高等學校の「現場の教師を悩ませて」きたのであった。

小論、および同時に執筆している三篇の論考は、この「外人」の問題について檢討し、筆者なりの結論を導き出そうというものである。

第一論文　〈陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考――「外人」の解釋史の概要――〉（小論）
第二論文　〈陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考――内山論文「以前」の解釋とその問題點について――〉
第三論文　〈陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考――内山論文「以後」の解釋とその問題點について――〉
第四論文　〈陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考――「洞窟探訪説話」群との關係において――〉

まず、第一論文である小論では、「外人」についての解釋の歴史の概要を述べたい。のちの三篇の論考の前提となるものである。第二論文、第三論文においては從來の解釋とその問題點について述べるつもりである。第二論文では内山論文「以前」の解釋について檢討し、第三論文では内山論文「以後」の論考を檢討の對象とする。また、最後の第四論文では「外人」を「洞窟探訪説話」群との關係において檢討し、筆者なりの見解を示したいと考えている。

【1】一九五九年～一九八九年の三十年間における「外人」の解釋史の概要

一九五九年の一海氏の論考以來、「外人」の問題については新たな展開のないまま、三十年という年月が過ぎ去った。その間に「外人」の問題についてまとまった文章が書かれることはなかったのである。ちょうど三十年後、一九八九年になって〈『桃花源記』について〉というシンポジウムが開かれ、新たな展開が始まった。このシンポジウムにおいて内山知也氏がこの問題について自らの見解を示したのである。そしてその記録が一九九〇年に公表された。「外人」の解釋についての問題はようやく新たな段階に入ったと言うことができる。

なお、このシンポジウムは、一九八九年十二月十六日に全國漢文教育學會月例會として行われた。會場は湯島聖堂である。また、このシンポジウムのあと、内山氏は一九九一年に論考〈「桃花源記」の構造と洞天思想〉を公表し、そこにおいてもシンポジウムの時と同じ内容のことを述べている。

*

では、一九五九年から一九八九年までの三十年間に出版された注釋書や解説書ではこの「外人」をどのように解釋してきたのであろうか。また、一九八九年から現在までの十數年の間においてはどうであろうか。たとえば、現在（二〇〇二年十月）のところもっとも新しい注釋書は田部井文雄＋上田武の兩氏による《陶淵明集全釋》（明治書院・二〇〇二年）である。その「通釋」では「そこかしこを行き來し、耕している男女の着物は、まったく外の世間の人たちと變わりがない」としている。そして「語釋」では「男女衣著、悉如外人」について次のように解説している。

男女の服装はすべて桃花源の外の世間一般の人と變わりない。「記」の本文中には「外人」の語が三か所見え、他の二例がともに問題なく「桃花源の外の世界の人」と解釋されるのに對し、ここだけは「漁師が見たこともない、（中華世界とは全く異質な）別世界の人」とする有力な説がある。

田部井＋上田兩氏は「男女の服装はすべて桃花源の外の世間一般の人と變わりない」と理解している。そして別の解釋として「漁師が見たこともない、（中華世界とは全く異質な）別世界の人」という「有力な説」があると述べている。

兩氏は「別世界の人」のまえに、（　）に入れて「中華世界とは全く異質な」という限定語を加えている。（　）を附けていることが何を意味しているのか必ずしも明確ではない。ただ、「中華世界とは全く異質な」という限定語か

らは、「別世界」を「外國」として理解していると讀みとることができる。すなわち、田部井＋上田兩氏は「外人」の解釋として、①「漁師が見たこともない、（中華世界とは全く異質な）別世界の人」と解するものと、②「桃花源の外の世界の人」と解するものの二つがあると考えているのである。

そして、もし田部井＋上田兩氏の言う「別世界の人」が一海氏の言う「外國人」と同じであるとすれば、――筆者の手許にあるものを調べてみたにすぎないが――たしかに、田部井＋上田兩氏の言うように「別世界の人」とするのは「有力な説」のようである。

ただ、もしこのようであれば、一海氏が一九五九年に問題を提起して以來、一九八九年に內山氏の發言があるまでの三十年間だけでなく、その後の十年あまりにおいても、二つの説だけがずっと行われていたように思える。しかし、より正確に言うとすれば、從來の解釋は、①「外國人」と解するものと、②「桃花源の外の世界の人」と解するものの二つだけではなかった。もうひとつ、田部井＋上田兩氏の言うのとは異なった意味で「別世界の人」と解するものがある。この「別世界の人」は、「外國人」を意味するものではない。それはおそらく當時の中國人にとって自分たちの世界とは異なった世界のことである。

いずれにしろ、これまでの解釋は、全部で三種類の解釋が存在している。

①「外國人」

②「桃源鄉の外の人」

③「別世界の人」

①の「外國人」というのは現在の日本語で「外人」というのと同じく「異國の人」を意味している。②の「桃源郷の外の人」は説明するまでもなかろう。③「別世界の人」というのは、たしかに、①の「外國人」とまぎらわしい。しかし、それとは明確に異なっている。田部井＋上田兩氏は、①と③とには差があること、すなわち「外國人」と「別世界の人」とのあいだには明確な違いのあることに氣づいていなかったのではないか。そのように推測されるのである。

この三十年間の解釋のすべてがこの三種の解釋のなかに含まれると言って良いと思う。これを「漁人」の服装との關係を基準にして分類するなら、次のように大きく二つに分類することができる。まず、大きく、「漁人」と同じ、あるいは同じような服装であるとするもの（甲）、次に、それとは異なっているとするもの（乙）である。

甲――漁人と同じような服装であるとするもの

乙――漁人とは異なった服装であるとするもの

これらの二つの説は、それぞれさらに幾つかに分けることができる。まず、「甲」の「漁人と同じような服装である」とするものであるが、それは一海説と内山説に分けることができる。ともに「外人」を「桃源郷の外（そと）の人」と解釋している。しかし、一海氏が單に「桃花源の外（そと）の人」というのに對して、内山氏は桃花源の世界は「洞天」であることを前提にした解釋である。「外（そと）の人」とは「洞天の外（そと）の人」だというのである。この點で兩氏は異なっている。この差は微妙ではあるが、その前提となっているものがまったく異なっている。したがって、質的にまったく異なった解釋であると言いうる。このことは注意しておいて良いことと思う。

さらに、「乙」の「漁人とは異なった服装であるとするもの」には、さきほどの分類における①の「外國人」と、③

の「別世界の人」と解釈するものに分けることができる。そして、①の「外國人」と解釈するものに大きな違いのあるものはないが、③の「別世界の人」には、「甲」に見た差異と同じ差異を認めることができる。一つは、「洞天」を前提としない説であり、もう一つは「桃花源」の世界は「洞天」であることを前提とした説である。以上のことを整理すると次のようになる。

甲――漁人と同じような服装であるとするもの

（一）単に「桃花源の外（そと）の人」という説（一海説）……A

（二）「桃花源」の世界は「洞天」であることを前提とした説（内山説）……B

乙――漁人とは異なった服装であるとするもの

（一）「外國人」と解釋するもの……C

（二）「別世界の人」と解釋するもの

1 單に「別世界の人」と解釋するもの……D

2 「桃花源」の世界は「洞天」であることを前提として「別世界の人」と解釋するもの……E

以上のように、すべてあわせて「A」「B」「C」「D」「E」の五つの説となる。これらを學界での論爭の順序に從って竝べるとすれば、まず「C」の「外國人」という解釋があり、それを批判する一海氏の「桃源鄕の外（そと）の人」という説「A」が唱えられた。そのあとに「桃花源」の世界は「洞天」であることを前提とした「漁人と同じような服装である」

という内山氏による解釈「B」が提唱されたと言うことになろう。そのあとに、「A」説を批判する形で「D」の、「單に『別世界の人』と解釋する説」が、さらに「B」説を批判する形で「E」の「『桃花源』の世界は『洞天』であることを前提として『別世界の人』と解釋する説」が唱えられたのである。

【2】「外人」の解釋の內容

これより以降、これらの説の概要を學界に提起された年代の順に従って見ていくこととしたい。

(一)「外國人」と解釋するもの

まず、「C」の「外國人」と解釋しているものである。そのように解釋するものは、一海氏の論考以後(一九五九年以後)では次のものがあるだけである。

一九九〇年　松枝茂夫+和田武司《陶淵明全集》岩波書店[岩波文庫・赤8-2]

松枝+和田兩氏は、「其の中に往來し種作する、男女の衣著は、悉く外人の如し(其中往來種作、男女衣著、悉如外人)」を「そのなかを行きかい、畑仕事をしている男女の服装は、どれもみな外國の人のようであるが」と譯している。このように解釋しているものを一海氏の論考以前(一九五九年以前)に求めるとすれば、まず、一海氏がとりあげた

次の二書がある。

一九四八年　狩野直喜〈桃花源記序〉《東光》五［狩野直喜先生永逝記念］弘文堂

一九四八年　鈴木虎雄《陶淵明詩解》弘文堂

また、一海氏の論考以前（一九五九年以前）のもので、一海氏が採りあげていないものを擧げればそのほかに、次のようなものがある。

一九二二年　釋清潭《陶淵明集・王右丞詩集》國民文庫刊行會

一九五一年　斯波六郎《陶淵明詩譯注》東門書店[5]

この二書も「外國人」と解釋しているものに含まれる。釋清潭は、「外人」に注を附け「漁人より見れば其風俗が本土人と異なる」としている。「本土人」というのが何を意味しているのか必ずしも明確ではない。しかし、「本土」に對する言葉はおそらく「異土」であろうから、「本土人と異なる」風俗とは「異國の風俗」ということになるものと判斷される。少なくとも、「別世界の人」というのではない。

斯波六郎氏は「其の中に（人人）往來（ゆきき）し種作（たがや）せるが、男女ともその衣著悉（よそほひすべ）て外人（とつくにびと）の如く」とあり、「外人」に「とつくにびと」とルビを振っている。こちらは明らかに「外國人」を意味している。

また、さきに引用したシンポジウムにおける田部井氏の發言から判斷すれば、高校の教科書の多くはこのように解釋

していたと推測されるのである。

（二）　單に「桃花源の外（そと）の人」と解釋するもの

第二に「A」の「桃花源の外（そと）の人」と解釋するものである。次に示す一海氏自身の二つの著作は當然この說に屬する。

一九五八年《陶淵明》岩波書店［中國詩人選集　第四卷］

一九六八年《陶淵明　文心雕龍》筑摩書房［世界古典文學全集　第二五卷］

一海氏は一九五九年に〈外人考――桃花源記瑣記――〉という論考を公表する前年の一九五八年に、岩波書店の「中國詩人選集」の一冊として譯注書《陶淵明》を公刊していた。そこにおいてすでに次のように譯している。

ここを往き來しつつ畑に働く男女の服裝は、みな漁師などよその土地のものと同じようであり、……」

また、その注では次のように述べている。

外人――外人ということばは三度出てくる。從來ここの場合だけは外國人と解し、異樣な服裝をしていると說くが、ここも他の二例と同じく桃源鄉の住民にとって外部の人の意であり、漁人と同じようなごくふつうの服裝と解すべ

きである。

さらに一海氏は、一九九七年の著作《陶淵明――虚構の詩人――》（岩波書店［岩波新書（新赤版）五〇五］）においても自説を守っている。

ところで、「外人」の「衣著」については、外國人のような見なれぬ服装とするのが、通説である。しかし私には、そうは思えぬ。「外人」とはここ桃源郷から見て外（そと）の人、すなわち外から來た漁師のような、ふつうの中國人をさすのだろう。したがって、「外人の如」き「衣著」とは、一般の中國人とあまり變わらぬ服装をいうのだろう。

一海氏のほかに「桃源郷の外（そと）の人」と解釋するもので、一九九〇年以前に出版されたものには次の書がある。

一九六七年　星川清孝《陶淵明》集英社[6]

一九八一年　高橋徹の《陶淵明ノート》國文社[7]

星川氏は「外人　桃源以外の所の人。外界の人」と注し、「そのなかを往ったり來たり、種をまいたり耕作したりしている男女の衣服は、ことごとく外界の人と同様であった」と譯している。

高橋徹氏は「7　〈桃花源記〉の構造――〈桃〉のシンボリズムを考える」の節においては、「住民の状態――男女のよそおいはよその土地の人の如く……」としている。この「よその土地の人」という言葉が意味しているものが何であ

るのか、ここでは必ずしも明確ではない。しかし、冒頭の譯の部分では「この中を行き來し、畑にはたらく人々は、男女の衣服も外の世界の人間と變わらない（傍點……門脇）」としている。したがって、②の「桃源鄉の外の人」というのと同じであることが分かる。つまり、「よその土地」というのは「桃花源」からしての「よその土地」ということのようである。星川氏、高橋氏が一海氏の論考を承けてそのように理解することとなったのか、あるいは獨自にそのような解釋にたどりついたのか、そのことは、これらの記述からはよく分からない。

また、一九九〇年以降に出版された著作で「桃源鄉の外（そと）の人」と解釋しているものに、次の三種がある。

一九九八年　興膳宏《風呂で讀む　陶淵明》世界思想社
二〇〇〇年　和田武司《陶淵明　傳論――田園詩人の憂鬱――》朝日新聞社
二〇〇一年　田部井文雄＋上田武《陶淵明集全釋》明治書院⑧

これら三書のなかで、そのほかの二書は一海氏の所說についてはなにも言及していない。しかし、田部井＋上田兩氏は「（この點の詳細は一海知義『陶淵明―虛構の詩人』岩波新書、一九九七、第一章參照）」と記しており、一海氏の所說に從うことを記している。田部井氏＋上田氏の言う一海氏の所說は、一海氏の一九五九年の論考や、一九五八年、一九六八年の譯注書ではなく、もっとも新しい一九八七年の著作ではあるけれども……。

ただ、和田氏は、松枝茂夫氏との共著である一九九〇年の《陶淵明全集》（岩波書店［岩波文庫・赤8-2］）では「外國の人」と譯しており、二〇〇〇年の著作では「外界（そと）の人」としている。なお、「そと」というルビは和田氏自身が附けたものである。いずれにしろ和田氏はこの十年間のあいだでその解釋を百八十度變えている。一九九〇年は松枝氏

との共著であったため自説を曲げていたのであろうか。それとも一九九〇年にシンポジウムの記録が公表され、一九九一年に内山知也氏の論考〈「桃花源記」の構造と洞天思想〉が發表されたのを承けて改めたのであろうか。その間の事情については何も書かれていない。

(三)「別世界の人」と解釋するもの

次に「別世界の人」と解釋するものである。「漁人」と同じ、あるいは同じような服裝をしている「桃源鄉の外(そと)の人」というのでないことはもちろんである。明らかに「漁人」とは異なった服裝をしていると解釋している。しかし、われわれが今日思い浮かべるような「外國人」でもない。一九九〇年以前に出版されたものでそのように解釋する著作に次のようなものがある。

一九八四年　南史一《詩傳 陶淵明――歸りなんいざ――》創元社(「外(よそ)の人」)
一九八八年　都留春雄＋釜谷武志《陶淵明》角川書店〔鑑賞 中國の古典⑬〕(「よその人」)
一九八九年　石川忠久《陶淵明》日本放送出版協會〔ＮＨＫ漢詩を讀む〕(「まったく違う世界の人」)

ここでの「外(よそ)の人」、「よその人」、「まったく違う世界の人」というのがどのような世界の人を想定しているのか、必ずしも明確ではない。われわれは無意識のうちに「外人」卽「外國人」と思いうかべる。しかし、これらの三者の理解が、そのようなことに對して、反省的であったこと、自覺的であったことは確かである。

一九九〇年以後に出版されたもので「別世界の人」と解釋するものには次の書がある。

二〇〇一年　沼口勝《桃花源記の謎を解く――寓意の詩人・陶淵明――》日本放送出版協會［ＮＨＫブックス９１０］

沼口氏は「そこに行き來し、耕作する男女の服装は、みな漁人とはちがうよその世界の人のようで」と譯している。この「よその世界」の意味するところもやはり明確ではない。しかし、その服装については、「漁人とはちがう」という言葉が添えられているように、少なくとも一海氏のような解釋でないことだけはたしかである。

（四）内山氏の新たな見解――「洞天」としての桃花源觀とそれにもとづく「外人」の解釋――

一海知義氏の論考〈外人考――桃花源記瑣記――〉が公表された一九五九年のちょうど三十年後の一九八九年にあらたな展開がはじまった。すでに述べたように〈『桃花源記』について〉というシンポジウムが行なわれ[9]、その席でパネラーの一人である内山知也氏が次のように發言したのである。

それから「外人」の問題ですが、「外の人」と讀めばいいのではないですか。「外人」という言葉にするから現在の日本語にまぎらわしくなって誤解するのです。「此の中の人」という言葉があるから「外の人」と讀めばいいので、なにも難しい言葉でも何でもない。あたり前の言葉じゃないですか。要するに洞天の中にいることに氣づかないことから起こる疑問です。

氏の發言のなかの「外の人」は、「ほかのひと」と發音されたのではなく、おそらく「そとのひと」と發音されたのであろう。内山氏は「桃源郷」の世界を「洞天」であるとし、[10]「外人」を「洞天」の「外(そと)の人」と解釋したのである。「桃花源」の田園のなかで「往來し種作する、男女の衣著は、悉(ことごと)く」「桃花源」という「洞天」の「外(そと)の人」のようであって、「漁人」のものと同じであるということである。

この解釋の結果そのものは、一海氏のものと變わらない。しかし、内山氏がそのような結論を出すにいたった理由に注目すれば、それは一海氏とは大いに異なったところがある。内山氏は〈桃花源記〉を「洞天思想」、あるいは「洞窟探訪説話」群という文脈に置くことによって、そのような結論に達したのである。内山氏による「新たな展開」とはそのような意味である。「洞天」という「壺」型の空間の構造から考えてみちびきだした解釋であり、説得力を持っている。

さらに内山氏は、その次の次の年、一九九一年に〈「桃花源記」の構造と洞天思想〉[11]という論考を公表し、自説を正式に、學界における論爭の舞臺にのせた。内山氏のこの論考は、「桃源郷」の世界は「洞天」であることを論證するために書かれたものであり、「外人」の解釋についての問題を主にして論じたものではない。しかし、そこにおいて「外人」についても言及し、次のように述べているのである。

後の『此中人』という洞天内部の人を指す語と對照すれば、明らかに洞天外に住む人の意味に用いられているのであって、『洞天』思想を理解すれば特に問題はない。

内山氏のこの論考を讀んだとき、筆者は、これで「外人」についての議論は決着がついたと判断した。

(五) 内山論文以後の「外人」の解釋

筆者は、「外人」についての議論は決着がついたものと思っていた。しかし、内山氏の論考のあとにも、「外人」の解釋について次のような三篇の論考が發表されたのである。しかも、そのうちの二篇は内山氏の結論に反對するものであった。

① 一九九二年、小出貫暎〈「桃花源記」中の「外人」の解釋について〉[12]

② 一九九三年、村山敬三〈「桃花源記」雜感—洞天思想・藍澤南城・授業實踐[13]——〉

③ 一九九五年には坂口三樹〈桃花源記「外人」贅說[14]〉

これら三篇の論考のうち、②の村山氏は、内山氏に同意することを表明している。しかし、①の小出氏、および③の坂口氏の結論は「別世界の人」と解釋するもので、「外人」の服裝は「漁人」とは異なったものとしている。その意味で小出氏の結論と坂口氏の結論は同じであると言うことができる。ただ、さきにすこし述べたように、この兩者には大きな相違がある。小出氏の論考は内山論文のあとに出たにもかかわらず、その本質は「内山以前」のものである。小出氏は、「桃花源」と「洞天」との關係をまったく考えていない。それに對して坂口氏の論考は「内山以後」のものであると言うことができる。これより以降、これら三篇の論考について、その概要を簡單に述べたい。

一、小出氏の論考について

①の小出氏の論考は三十數年前に出された一海氏の説に反對するもので、内山氏の論考を對象とするものではない。「外人」を「桃源郷から見ての外人ではなく、やはり、漁師から見ての『外人』、すなわち漁師にとって『よその人』『境外の人』『別の世界の人』自然であり、妥當な解釋だと考えるのである」と結論づけている。

ただ、小出氏は、みずからの論考（一九九二年）の前に公表されていた「シンポジウム」の記錄（一九八九年に行なわれ、一九九〇年に公表された）も、内山氏の論考（一九九一年に公表された）も見ていないようで、この二つの文章についてまったく言及していない。もっぱら一海氏の論考を批判の對象とするものであり、内山氏によってもたらされた新たな展開についてはまったく言及していない。

このように言うと、小出氏の論考は價値のないもののように誤解されるかも知れない。しかし、そうではない。一海説に對する小出氏の批判は、一定程度の道理を有するものだと判斷されるのである。その詳細は、主として第三論文〈陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考——内山論文「以後」の解釋とその問題點について——〉で檢討されるはずである。

二、村山氏の論考について

②の村山氏の論考は、小出氏の論考に對してなされたものである。村山氏は内山氏の論考を承け、次のように述べている。

そもそも洞天思想に基づいて、この村が穴の中の世界だと考えるならば、漁人からみての「外人」か、村人からみ

ての「外人」かという議論自體がむなしいものになってくる。

村山氏のこの文章は、その言わんとするところが必ずしも明確ではない。しかし、この文章が、内山氏の解釋に同意するものであることは確かである。なぜなら、この文章の前に「『外人』の問題にしても、次の内山先生の言葉は、正に目から鱗が落ちるという類のものであった」と述べられているからである。

ただ、村山氏の論考は論證と稱するに足るほどの中身を有しているわけではなく、内山氏の論考に附け加えるものもほんのわずかしかない。このことについても同じく後の論考（第三論文）において述べるつもりである。

三、坂口氏の論考について

③の坂口氏の論考は、小出・村山の兩氏の論考を承けてなされたもので、次にあげるように内山説に反對する結論に達している。そして、内山氏の説に反對するということは、當然のことながら、そのまま一海氏の説に反對することにもなる。

以上のように考えてくると、「桃花源記」の問題の「外人」は、やはり漁師から見ての「外人」――よその人・別世界の人――と考えるのが至當なのではあるまいか。

坂口氏のこの論考は、たしかな證據をあげ、十分に論理的に論證されていて、その結論への過程は人を納得させるものとなっている。

ただ、筆者は坂口氏の論證に完全に納得しているわけではない。坂口氏の論證は、氏の擧げた證據に対する氏自身のとらえ方に問題があると考えている。とくに「洞窟探訪説話」との關係における文脈の把握の仕方がまったく逆である。そのため、氏の結論は誤った方向を向いている。筆者はそのように考えている。このことの詳細も、のちの論考（第三論文〈陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考――内山論文以後の解釋とその問題點について――〉、および第四論文〈陶淵明〈桃花源記〉「外人」小考――「洞窟探訪説話」群との關係において――〉）で論じられるはずである。

（六）以上のまとめ

以上述べてきたように、「外人」の解釋についてはいまなお贊否兩論の議論がなされ、この議論はまだ決着がついていない。いや、内山説が出て以降は、むしろ、内山説（一海説をふくむ）に反對する論考の方が優勢であるようにさえ感じられる。そのように感じられるのは、次のようなことがあるからである。つまり――一海氏の説に對する小出氏の論考や、内山氏の説に對する坂口氏の論考は、論證と稱するに足るに十分な證據が擧げられ、たしかな論理展開がなされている。一方、内山説に同意する村山氏の論考であげられている證據は藍澤南條の「桃源の圖」という詩だけで、「論證」と稱するに足るほどの論の展開がされていない――ということがあるからである。

村山氏の論考は六〇〇〇字（四〇〇字×十五枚）に滿たない。そしてさらにそれが、獨立した三つの部分からできている。三つの部分とは、一つは、内山氏の説に贊同すると述べる部分である。とくに證據が擧げられているわけではない。二つめは藍澤南條の「桃源の圖」という詩を例に出して、藍澤のような「〈桃花源記〉の理解は南條獨自のものではなく、江戸期の實力ある儒者に共通のものであったろう」と述べる部分である。「藍澤のような〈桃花源記〉の理解」

とは、「桃花源」の世界を「洞天」と見なすものである。三つめは〈桃花源記〉を高等學校の授業で行なった「實踐記錄」を記す部分である。

そして、この三つの部分が必ずしも有機的につながっていない。したがって、村山氏の論考は「論證」と稱するに足るほどの論の展開がされていないのである。いずれにしろ、村山氏の論考は、「外人」論爭とも稱すべきものに決着をつけるには必ずしも十分なものではなかった。というよりも、村山氏にとっては「外人」の問題は、實は藍澤たちの江戸時代の理解を思いおこせば十分であり、あらためて論ずるに足るほどの問題ではないということのようである。「桃花源」の世界が「洞天」であることを忘れてしまったことから生じたものにすぎない、というような意味あいをこめてであろう。第二の部分の最後を「一體、いつからこのような解釋（「桃花源」の世界は「洞天」であるという解釋……門脇）が忘れられてしまったのであろうか」という言葉で締めくくっているのである。

さて、先に述べたように、筆者も「外人」の問題はもはや決着がついてたものと思っていた。その意味で村山氏が示した「江戸時代の理解」は、やはりそうであったかと思わせるものであった。しかし、内山氏の論考のあとに發表された小出、坂口の兩氏の論考（この二篇の論考はそれぞれ一海説・内山説に反對するものである）にも一定の妥當性を有するところがあり、「外人」の問題についてより深く、かつより廣い議論を提供しているものと判斷される。

なお、筆者は、すでに述べたように、「外人」という言葉そのものは、一海氏や内山氏が理解するように、「外（ほか）の人」「外（そと）の人」、あるいは「外（よそ）の人」と解釋しなければならないと考える。そして、「外人」という言葉の「外」とは、一海氏が言うように「桃源鄉の住民にとって外部」であることは當然としても、それだけではなく、内山氏が理解するように、「洞天の外」でなければならないと考えている。

むすびにかえて

従來の論考は、それぞれの論考において、さまざまな觀點からこの「外人」の問題を検討している。しかし、その觀點は必ずしも有機的につながっているわけでもなければ、一貫した論理のもとにあるわけでもなかった。そこで、筆者は、従來の論考を整理し、それを筆者なりに組みたてなおした。その結果、「外人」という言葉の意味するところを検討するには、次のような六つのレベルの「文脈」のもとで再検討することが、一貫した論理のもとにある故に、有效であると考える。

（1）一語、一文における検討
（2）前後の文章との關係で構成される文脈における検討
（3）文章全體で構成される文脈における検討
（4）〈桃花源記〉と〈桃花源詩〉との關係で構成される文脈における検討
（5）唐代の「桃源」詩との關係で構成される文脈における検討（時間軸における文脈）
（6）「洞窟探訪説話」との關係で構成される文脈における検討（空間軸における文脈）

これらの六つの面は（1）「一語、一文における検討」から（6）「『洞窟探訪説話』との關係で構成される文脈における検討」へと次第にその「文脈」の範圍が廣くなっていっている。そして、それぞれの文脈において、その解釋にあ

る種の妥當性と不當性が同時に存在していると思われるのである。

なお、「一語、一文における検討」は、嚴密に言えば、「文脈」における検討ではないのかも知れない。他の部分との關係でなりたつのが「文脈」という考え方だからである。そうだとすれば、「一語」「一文」はいわゆる「文脈」ではない。しかし、それを他の部分との關係を持たない「零」の文脈、あるいは「文脈」を構成する前提となる最小單位の「文脈素」とでも捉えれば、「一語、一文における検討」も「文脈」におけるものとして検討することが論理的に成りたちうるものと考える。

第二、第三の論考では、順次、それぞれの文脈における検討について述べ、その問題點を指摘したい。ここではそのことだけを述べ、ひとまず小論を閉じたい。

注

(1) 〈陶淵明「桃花源記」小考——從來の理解とその問題點——〉《大東文化大學・漢學會誌》三八・一九九九年三月。また、〈陶淵明「桃花源記」小考——從來の理解とその問題點・再說——〉と題して(《大東文化大學・漢學會誌》四一・二〇〇二年三月刊行豫定)、前稿の補足を行った。

(2) 內山知也他〈(シンポジウム)『桃花源記』について〉《新しい漢文教育》一〇・全國漢文教育學會・一九九〇年・研文出版

(3) 〈外人考——桃花源記瑣記——〉(《漢文教室》四五・大修館書店・一九五九)

(4) 狩野直喜〈桃花源記序〉(《東光》五〔狩野直喜先生永逝記念〕・弘文堂・一九四八)
鈴木虎雄《陶淵明詩解》(弘文堂・一九四八)
一九八一年に北九州中國書店から再版された。

(5) 一九九六年に《陶淵明》〔中國名詩鑑賞1〕として小澤書店から再版された。

(6) 二〇〇〇年に《歸去來の思想——陶淵明ノート 增補版》として、いくらかの文章を加えて再版された。

(7) ○男女衣著、悉如外人—男女の服裝はすべて桃花源の外の世間一般の人と變わりない。「記」の本文中には「外人」の語が三

(8)

か所見え、他の二例がともに問題なく「桃花源の外の世界の人」と解釋されるのに對し、ここだけは「漁師が見たこともない、（中華世界とは全く異質な）別世界の人」とする有力な説がある。しかし、「其中…男女」というように桃源の村中の人を指す語句と對照すれば、ここでの「外人」は、おのずから外界の俗世間の人を意味することは明かである。

（9）注（3）

（10）「桃源鄉」の世界は「洞天」であると最初に指摘したのは、內山氏ではない。三浦國雄氏である。三浦氏は一九八三年の〈洞天福地小論〉（《東方宗教》六一）、〈洞庭湖と洞庭山〉（《月刊百科》二五〇）という二篇の論考において、そのことを指摘している。この二篇の論考は、のちに《中國人のトポス——洞窟・風水・壺中天——》（平凡社［平凡社選書一二七］一九八八年）の收められた。その間の詳細については、注（1）の拙論を參照のこと。

（11）《大東文化大學漢學會誌》三〇［山井教授追悼號］

（12）《漢文教室》一七三・大修館書店

（13）《漢文教室》一七五・大修館書店

（14）《漢文教室》一八〇・大修館書店